ひなばと

～ＮＰＯ法人ピピオ子どもセンター　会報～

vol. 47

２０２６年２月１日

日本子ども虐待防止学会＠ほっかいどう大会　参加報告

2025年11月15、16日に札幌で日本子ども虐待防止学会第31回学術集会ほっかいどう大会が開催され、両日とも参加してきましたので、概要について報告いたします。

今年もやはり沢山学びのある学術集会であるとともに、特に自分の思い込みや固定した考え方を深く反省する面もあったので、その点をお伝えします。

その一つが、「エデュケーショナル・マルトリートメント」についての武田信子さんのお話でした。「エデュケーショナル・マルトリートメント」とは、教育虐待とも言われますが、武田さんは、教育虐待というと保護者によるものという印象になるが、もう少し違うニュアンスも含まれるということでした。それは、私たち一人ひとりの固定化した価値観がもたらすものです。「より経済的に成功した方が良い」「そのためには勉強した方が良い」という考え方が、勉強しなければいけないと子どもを追い詰めることに繋がるということでした。自分の子どもに対して、「勉強だけが全てじゃない」「お金を稼ぐことだけが全てじゃない」とは言いますが、一方で、「出来るだけ経済的に苦労しないで欲しい」と思っています。しかし、それは、親がさせたいことであって、子どもがしたいことかどうかは分かりません。そうした中で、社会的な価値観を子どもたちに押し付けることになっていないのか、ということを考えさせられました。

また、支援者と子どもの対等性ということについても、示唆深い話がありました。風間暁さんという方は、支援者がどれだけ子どもと対等になろうとしても、支援という枠組みで接する限り、対等にはなれないという話をされました。風間さんは、元々被虐待の当事者であり、今は支援者側にいるが、支援という形をとることで、子どもに煙たがられたり、正直にぶつかり合うことができなくなると感じているそうです。そのため、子どもへの支援を禁止した居場所づくりをしているということでした。私たち支援者としては、対等に意見を言ってねという言い方をしたりしますが、支援という枠組みの中では、子どもたちが言いたいことが言えないということもあるかもしれないなと感じました。

そして、今年、特徴的な取り組みと感じたのが、被虐待の当事者の方が参加する企画が多くなっているということを感じました。学術集会は、支援者たちの集まりという形であり、これまでは当事者の体験発表のような形で当事者の参加はありましたが、当事者が沢山集まるような企画というのはありませんでした。しかし、今回は、被虐待当事者の若者が数多く参加して、意見交換や経験を語り合い、その結果を報告するというようなプログラムもありました。そのおかげで、色々とこれまであんまり聞けなかったような話も聞けたところがあったので、参考までに共有したいと思います。

- 大人が自分たちの意見を聞きたがるが、意見を言っても結局何も変わらないとことが多いので、子どもは話す気にならない。
- 就活の時に、良好な親子関係を前提として親に

関する質問をされたりする。しかし、被虐待当事者や施設出身者は答えられず、結果落とされてしまう。
・どうしても辛い時、無理に元気を出そうとするのではなくて、一度病みきることも必要。
・大人は親子再統合ということで働きかけてくるが、本当に親との関係性を築くことが無理という人もいる。もっと、子どもの意見を大切にして欲しい。
・大人は、相手が社会的養護の中で育っていると知ると、困っていることがあるでしょ？という前提で接してくる。そういう固定観念で見られるのは嫌。

当事者の子どもたちが全員同じ気持ちとは限りませんが、こうした想いを持つ子どもたちがいることを自覚して、これからも関わっていかなければならないなと学んだ学術集会でした。

とても、有意義な時間を過ごせるので、興味ある方は是非ご参加ください。

理事　砂本　啓介

会員の皆様へのご挨拶　　那須　寛

こんにちは、理事の那須です。

2011年４月に子どもシェルターピピオの家を設立してから今年で15年となります。この間、様々なものが変わりました。広島の町並みも大きく変わりました。2011年当時は旧広島市民球場の解体中でした。2012年からの約10年間は暫定的なイベント広場として利用され、2021年にひろしまゲートパークが開業しました。また、隣接する中央公園にはサッカースタジアムが建設され、プロ野球、Ｊリーグともに広島市内中心部から近くで観戦できるようになりました。そのほかにも広島駅２階への路面電車乗り入れや新駅ビル・ミナモアの開業、今後は中央図書館の移転やホテルの建設なども続きます。

町並みだけで無く、気候も変わってきました。広島では2014年と2018年に豪雨災害が発生し、大きな被害が発生しました。近年では、ゲリラ豪雨という言葉も使われるようになり、毎年どこかで土砂災害が発生しています。気候の温暖化というのはずいぶん前から言われていますが、最近は男性も日傘をささないとやってられないほどの暑さとなり、海水温の上昇により、漁獲場所が北上したり、獲れなくなってきている魚種もあります。昨年秋から報道されております牡蠣の歴史的な不漁には私たちも驚かされました。

また、2020年からは数年間にわたるコロナ禍で、移動の制限や営業の自粛等も行われました。その結果、運動会の開催方法や観覧方法、ＰＴＡなどコロナ前までは伝統的に踏襲されていたことのなかにも変化が生まれ、オンラインミーティングの普及など新たに定着していったものもあります。

これらのようにピピオの家が開設されてから現在まで、変わっていったものがたくさんあります。他方で、この15年間変わらないものもあります。それは私たちが子どもシェルターを設立した理念、すなわち居場所がない子どもたちに安心して過ごせる場所を提供すること、は全く変わっておりません。もちろん入居する子どもそれぞれに応じた取り組みが困難を極めるときもありましたが、入居中は子どもを中心にして、スタッフ、子ども担当弁護士、理事、事務局が連携するとともに、子どもたちがピピオの家を巣立った後には子どもたちに大きく羽ばたいてほしいという思いは変わりません。何年も前に退去した子どもから近況の連絡があることがたまにあります。社会の中で活躍している姿や困難に直面しても一歩ずつ前に進んでいる様子を見て、私たちも日々の活動のエネルギーをもらっています。

もう一つ変わらないものをあげると、会員の皆さまのご理解です。当法人が15年間大過なく活動を続けてこられたのも、会員の皆さまのご支援があったからだと感じております。私たちの活動はささやかなものではありますが、今後も変わらず行き場の無い子どもたちのために力をつくしていきたいと考えておりますので、今後とも温かい目で見守っていただければ幸いです。

スタッフ通信

はばたけ荘のスタッフＴです。

▼「チームはばたけ荘」として

「楽しそうに仕事をしていますね」は、本年度入居した子どもがスタッフに発した言葉です。

　スタッフが協力して前向きに取り組んでいることの嬉しい評価だと思いました。このように日々、4名の子ども達の呟きを受け止め、子ども達に元気や勇気を、そして笑顔が出る「はばたけ荘」にしたいと取り組んでいます。

　毎月子ども達一人ひとりと話し合って目標と具体的な行動を設定します。その設定に沿って日々サポートしているのです。サポートする上で大事にしていることは、スタッフの共通理解とリスペクトです。10時から11時に勤務の引継ぎをしているのですが、子ども達の前日の生活の状況と今日の予定を詳細に伝えて、確実にサポートの継続と深化を図っていくのです。口頭での引継ぎだけではなく、引継ぎ簿に生活の記録を記載して他のスタッフも子ども達の動きを把握し、また引継ぎ簿で中長期に渡る子どもの動きや課題等を理解します。この引継ぎ簿には他のスタッフからのコメント欄も設けていて、子どもへのサポートや思い、考えに対して共感やリスペクトのコメントを記入していきます。他のスタッフからのコメントで子どもたちへの対応に確信をもち、ヒントを得ることができるのです。もちろん反省もします。これが自分の成長につながっています。

　引継ぎ時には、一緒にコーヒーを飲みながら勤務したスタッフを労い、課題が出れば一緒に考えて行きます。さらにはストレスを吐き出して勤務を終えるようにしており、スタッフが落ち込んで仕事を終え帰ることにないようにしています。

　一人勤務をしていますから、子どもへの対応や判断が良かったのかと、いつも反省をしているのが現状です。一杯のコーヒーで気持ちを切り替え、元気になって欲しいと思っています。一杯のコーヒーは元気の源でもあるのです。

「スタッフさんが病気になり休んだら、はばたけ荘はどうなりますか」と、子どもたちに聞かれることがあります。体調を崩して勤務に穴を空けないように、スタッフ一同非常に気をつけています。ここ「はばたけ荘」は子どもたちにとって大事な大事な居場所、安全で安心できる場所、自立する場所です。しっかり守っていかなければいけません。こうして「チームはばたけ荘」としてスタッフ一丸となって取組を進めているのです。

▼「たくさん食べて元気になって」

「チームはばたけ荘」の強力な支援者として食事ボランティアの皆さんを抜きには語れません。食べることは豊かに生きることであり、幸せを感じることだと思っています。「OT君に会いました。就職が決まったそうで良かったですね。頑張ってね」「涼しくなりましたね。やっぱりスープ！　しっかり食べてあたたまってね。」（献立表ノート担当者コメントより）

　子ども達がお腹いっぱい食べ元気と笑顔になることを願い、仕事を持ちながらも食事を作ってくださるボランティアさん達は、「チームはばたけ荘」の強力なメンバーです。

▼「輝いてほしい」

　2026年、午年（丙午）がスタートしました。情熱や勢いが高まり太陽のようなエネルギーに満ち溢れた一年になると言われています。失敗しても躓いても自立を目指し一人ひとりが輝いて欲しいと願い、今年もスタッフがチーム一丸となってしっかり寄り沿っていきたいと思っています。

　10月12日（日）に岡山県で、岡山の子どもシェルター「モモ」、高知の子どもシェルター「おるき」、ピピオ子どもセンターから、理事、スタッフらが参加して中国・四国子どもシェルター交流会が開催されました（午前中：講義、ワークショップ、午後：分科会）。スタッフの感想をご紹介します。

▸ 分科会では、各子どもシェルターのルールや悩みについて話しました。入居者の無断外出の対応や、希死念慮の強い入居者への対応、身体接触について、職員の精神面の負担に関して議論をすることができました。他の子どもシェルター職員の方々と本音や、悩みを深掘りしながら一緒に考えることができたように思いました。

▸ 今回の交流会には、初めてスタッフ３人が揃って参加することができ、共に働くピピオのメンバーとの関係性が広がり、深まったように思います。

▶ 15年目を迎えるピピオの家での今までの取り組みを振り返るいい機会になり、時代の変化に合わせた対応の必要性を感じました。スマホ等の通信機器の扱い、シェルターという制限の多い中でいかに子どもたちの生活上の権利を守るか、精神的に不安定な子どもへの専門的な関わり等の課題をあらためて考えさせられました。

▶ 何年も働いていると何かにつけて慣れてしまう事もあると思いますが、まだ新しい高知のシェルターの方の悩みを聞き「最初はそうだったなぁ～。そんな事もあったなぁ～。」と思いだしたり、他のシェルターの対応を聞いたり、ピピオ側の対応を伝えたりする事で色々な刺激を受けました。

こどもの日記念シンポジウム２０２６のご案内

当法人設立の契機となった広島弁護士会主催の「こどもの日記念シンポジウム」が、2026年４月26日（日）午後１時30分から広島市青少年センター（広島市中区基町５－61）で開催されます。

今回は、「あなたには何ができますか？～身近に迫る10代のオーバードーズ（OD）と薬物乱用～」というテーマで、第１部では、舟入高校、沼田高校、基町高校、広島市立広島商業高校演劇部と弁護士らで結成した「劇団ピピオ」による演劇「はばたけピピオパート15『たちまち―in the rain』」の上演を、第２部では、薬物乱用防止について講義を行っている大学生と第１部に参加した高校生らで薬物乱用に関するパネルディスカッションを行う予定です。

若年層の薬物乱用は、近年増加傾向にあり、子どもが薬物依存に陥ってしまうケースが後を絶ちません。大麻取締法が改正され、令和６年12月12日より、大麻の使用についても、罰則が適用されることになりましたが、検挙された大半は、30歳未満の若年層であり、深刻な社会問題となっています。

子ども達が薬物による被害を受けることのないような社会の実現に向けて、私たちができることを考えていけるシンポジウムとしたいと考えています。

関心のある方、是非ご来場ください。

弁護士　川﨑　浩介

ピピオ掲示板

寄付等のご協力　ありがとうございました

コストコホールセールジャパン株式会社様、高橋様、山本様、石田様などから寄付金等をいただいております。日々の子どもたちの生活や、より充実した自立支援のために活用させていただきます。

この場を借りて御礼申し上げます。

発行者　特定非営利活動法人ピピオ子どもセンター　事務局
〒730-0012　広島市中区上八丁堀７番10号　ＨＳビル404号室
TEL：　082－221－9563　　FAX：　082－555-3659
ホームページ：http//www.pipio.or.jp